人文学部准教授
森　正人

もりまさと
博士（地理学）
専門分野は文化地理学、民俗学

この記事に関連した情報は以下のアドレスでもご覧になれます。
http://www.human.mie-u.ac.jp/~mori/index.html

右図／複雑な力のせめぎ合いと交渉への視点は、フランスの思想家のミシェル・フーコー、ジャック・デリダ、ジル・ドゥルーズからヒントを得ている。

物事の複雑な関係性を探り、自明視された文化を追究する。

普段、何も考えることなく受け止めているさまざまな文化現象。
しかし、そこに目を凝らすと、固定観念の曖昧さや
事象の複雑な関係性が浮かび上がってきます。
人文学部では、文化地理学の観点から文化を追究し、
物事を疑い、思考し続けることの重要性を発信しています。

イギリスで産業革命や都市化が進展すると、民謡歌手はストリートミュージシャンへと転業した。彼らは人々の関心を引くためにしばしばサルを連れていた。

思考停止の前に

日常生活で何かを深く疑うことがあるでしょうか。私は文化地理学を通して、自明視された空間、場所、文化を考える研究をしています。とはいえ、何か統一的なトピックがあるわけではなく、四国遍路、日本人論、衛生観念と環境観念における人間の感覚、おしゃれな都市空間と社会的排除の問題、ポップ音楽などを通してそれを考えてきました。ここでは、普段何気なく耳に入っている音楽を考えてみたいと思います。ポップスの各音楽ジャンルは、あるパイオニアが特定の目的で作ったもので、今や本来の目的から外れて大衆化していると説明されることがあります。しかし、音楽はある場所に留まるのではなく、さまざまな場所を移動しながら受容されたり拒絶されたり、別の音楽との衝突の中で改変されたりと、常に変化し続けています。また、「あの音楽は、昔は社会的不満の表明だったけど、今は音楽産業によって商品化されてしまった」というもの言いは、商品化か抵抗かの二分法でしか音楽を捉えていません。しかし、音楽はその両方でもあり複雑です。

ストリートミュージシャンたちの定期的な演奏の場として、19世紀のイギリスにはミュージックホールが誕生した。写真はシャンペン会社と契約し商品を広告した売れっ子芸人のジョージ・レイボーン。

アメリカでの蓄音機の発明やラジオの普及により、音楽は一定の時間内に終わる必要がでてきた。事前に演奏の打ち合わせをし、大人数でそれをバンドとして演奏する「スウィング・ジャズ」が登場した。

1950年代のイギリスでは、カントリーミュージックはスキッフルというジャンルに吸収された。ジョン・レノンなどのロックミュージシャンは、このスキッフルから音楽生活をスタートしたと言われる。

しばしばジャズの起源地と言われるアメリカ、ニューオーリンズの「悪所」のストーリーヴィル。しかし、すでにラグタイムなどさまざまな音楽ジャンルが周辺地域には存在していた。

複雑なものに目を向ける

現在の英語圏人文学では、人間存在の複雑さが議論されています。それは複雑論的転回、とくに「存在」を沈思する態度は存在論的転回と呼ばれます。音楽は空気をある法則に従って振動させた非物質です。しかし、空気を振動させるには物質が必要です。また、音楽の産業化には、コンサートホールやレコードやラジオ、最近ではiPodや携帯電話などの物質が必要です。そうして物質化された音楽が、人間の意志という非物質を作ったり刺激したりして、新しい社会制度やネットワークなどの物質的生産を要求します。従来、人間と非人間（動物、自然、物質など）は二項対立で捉えられてきました。そこには、対立する二項はいずれ予想される結果に向かう予定調和があります。しかし音楽は、物質と非物質が何度も折り重なりながら形成されているのです。それでも、一つの音楽ジャンルが結果的に形成されたと言ってしまうと、それも予定調和だと言われてしまいます。どうすればこの袋小路を抜けられるでしょうか。

述語としての世界

あらゆる音楽ジャンルは一つの「歴史」を持っているかのように語られます。しかし、その周辺に目を配ると、今では一つの音楽ジャンルやその歴史に含まれていない、いくつもの「そうにもなりえた歴史」があります。例えば、同じ音楽でも白人向けのカントリーと黒人向けのブルースと呼ばれていたように、音楽ジャンルごとの差異も実は明確ではありません。時間のあらゆる断面では、いくつもの可能性があります。それらのうち、行われたと語られたものが、本当に起こったこととして記録されるのです。ここでは、主語が述語を決定するのではなく、述語が主語を決定します。何かが先に実在するのではなく、何かは事後的に実在するのです。アメリカ南部がジャズやブルースの発祥地として紹介されますが、その場所や空間がその音楽を作り出したのではなく、語られる中で、ブルース発祥地としてのある場所が立ち上がるのです。しかも私たちがジャズの歴史を語り得るのは、ジャズとして既に誰か（他者）によって語られているからです。私たちは、自分で何かを考えているのではありません。他者の言葉を語るという身振りの中で、「自分」という主語が生起するのです。自分と他者、あるいは人間と非人間は常に襞のように折り畳まれています。だから、両者を分ける切断線の上に身を置いて見つめることで、なぜそうした切断線ができ上がったのかを問うことができます。

立ち止まらずに考え続けること

最近の私の一連の研究は、単純な二項対立の決定不可能性を何かの契機を手がかりにして探し出す点で共通しています。これらを考える身振りを繰り返す中でのみ、かろうじて私らしきものが生成されています。ただし、述語が主語を決定するなら、一秒前と現在の私たちは別人のはずです。だから、立ち止まって思考しているように見えても、立ち止まってはいないのです。そうすると、私たちは時間と空間に対する新たなイメージが求められるのではないでしょうか。世界はその度ごとに全面的に始まり、終焉しているのでしょう。